

寺報 北斎名画 特別公開 特集号

通刊40号

千葉県いすみ市荻原2136 ☎0470 (86) 3816

行元寺発行 FAX 同上

文責 市原 淳 田

歓 迎 観光・研修旅行

土・日・祝 個人・一般公開
平日 予約 団体等

10:00~16:00

文化財修復基金 団体300円/個人500円

神奈川沖浪裏

— 房総浮世絵美術館蔵 —



北斎「神奈川沖浪裏」の原景

波の伊八「波に宝珠」

巨大な波の彼方に見える富士、波を下から見上げ、舟を上から見おろす。これまで波の背は多くの人々が描いてきたが、浪裏つまり波を下から描いた人は稀だ。あえて言えば尾形光琳に、北斎の「神奈川沖波裏」であろう。

— 行元寺 波に宝珠 —



北斎名画と 堤等琳、波の伊八

10/15(土)~11/6(日)

後援/房総浮世絵美術館

近刊 北斎の南総行脚

市原 淳 田 著

加えていま注目されているのが、房州が産んだ俗称「波の伊八」の彫刻「波に宝珠」(行元寺蔵)で、北斎・伊八とも錦絵と彫刻の差こそあれ、共に波裏を描いた。この両者とも覗き画法で、得意を極めた堤等琳の影響によると考えられ、キュービズム(立体派)の典型と言える。しかも北斎の波しぶきも、等琳の点描法によると思考され、名画の原景が、堤等琳や波の伊八にあると言っても過言ではないと考え、両者を紹介することとした。

北斎“堤等琳の画法を慕う”

つみとうりん

『点描法』に『覗き画法』

文化三年(1806)秋、北斎は堤等琳の画を慕って飯縄権現(現いすみ市岬町和泉)を訪れた。ここに堤等琳と波の伊八が長期滞在し、互いに教授し合って天井画と彫刻が生まれた。

「北斎伝」



初公開 堤等琳「万里の長城」屏風

〈富津市 安国寺 楠見正道氏 蔵〉



富嶽三十六景

かじかざわ

「甲州石班沢」

岩頭を画面の中心におき、右下に続く網と波頭、波裏が描かれ、点描法を駆使している。

「たかはしのふじ」

江戸小名木川で、この高橋が最も高かった。橋脚の間から股のぞきのように、富士を小さく覗く奇抜さ。

文化元年以降に 点描法がみられる

漢画の皴法(しほほう)に工夫を加え、点描法を案出したのは、堤等琳と考えられている。文化元年(1804)以前の北斎の作品には見られないからである。上掲の堤等琳の「万里の長城」屏風は今回が初公開でこれは、苔を点描法で表現した点苔描法だが、堤等琳の弟子である等随作になる、行元寺の杉戸絵「老梅と白鷹」にも、点描法が見られる。



たかはしのふじ 〈房総浮世絵美術館蔵〉



等琳「韓信の股ぐり」

北斎の覗き画法

〈写真提供 浅草寺〉

「たかはしのふじ」の作品は本邦には全くといってよいほど遺っていない貴重な一枚である。これがのち富嶽三十六景の「深川万年橋下」に転生するのだが、北斎は多く覗き画法で描いている。富士を桶屋の股の下から覗く「跨ぎの不二」「尾州不二見原」また「遠江山中木挽図」などが、その典型は「神奈川沖浪裏」図で、浪裏は下から覗いている。これらは堤等琳の得意とした覗き画法にあらう。



波の伊八 彫刻 (部分)



北斎漫画 初編



富嶽三十六景 三井見世略図

江戸期の超ロングベストセラーといわれている「北斎漫画」は、門弟に対しての絵手本として描かれた。この漫画という言葉は、北斎が初めて用い、漫画という用語を自分の画に応用した。

彫刻からヒント?

この第五編は「規矩準繩」編で、規はぶんまわし今でいうコンパス、矩はさしがね、準は水準器、繩はすみなわで、建築や彫刻用語である。この

「規矩準繩」編では、二九枚のうち一六枚が鳥居・寺門・釣鐘・経堂屋根・輪蔵・堀で、北斎の主張する「規矩方円術」に満ちている。

こうして北斎は円と角などの幾何の術によって、絵の割

きく 規矩二ツを以て画となす 円と角で作画案出 「北斎伝」

出し法を考えた。北斎は若年のころ、ある彫り師のもとで彫刻の修業をして、「楽女格子」一冊のうち末六丁の文字彫りをした経験があった。これが波の伊八等の彫刻に接したことよみがえって、絵に応用したものと考えられる。

「北斎漫画」のあと「富嶽三十六景」が描かれ、最も知られている「凱風快晴」いわゆる赤富士は、二等辺三角形二つの組合せといわれている。「江戸日本橋」「三井見世略図」「尾州不二見原」など典型だろう。



北斎高弟 昇亭北寿
「九十九里地引網大漁獵正写図」

— 太東埼に いすみ連山か! —

北斎の「規矩方円説」をすすめ 明暗三角形の並列で 幾何学手法を考案

昇亭北寿は北斎の高弟で、九十九里浜の地引図を描いた。左方に見えるのは太東埼で、右方はいすみの連山であろうか。この連山を三角形を多数並列して、重畳たる連山と懸

崖を立体的に表現した。いわば幾何学的手法で、北斎の規矩方円説から出たとされ、ピカソの絵画はこれにヒントを得たという。

(個人蔵)

千絵の海 総州銚子

房総浮世絵美術館蔵



現存わずか

北斎「千絵の海」

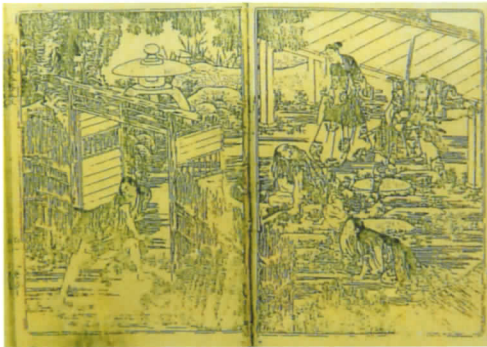
一挙8点公開

「千絵の海」は、文政末（1829）から天保十一年（1840）北斎の総房旅行にかけて描かれたとされる。諸国の漁労と水の造

形を主題として描かれた。「千絵の海」は「智恵の海」の言葉遊びで、智恵が豊富という意味である。



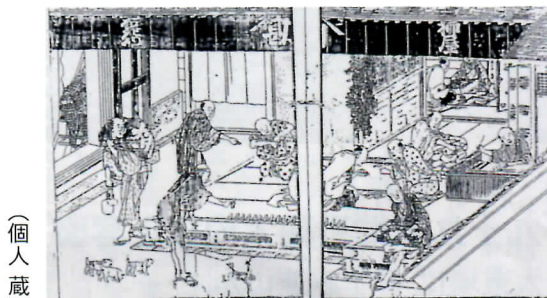
千絵の海 下総登戸



久留里

梅暮里谷峨

「山椒大夫」



佐倉柳屋

(北斎挿絵)

(個人蔵)

北斎高弟 辰斎肉筆画

しんさい

辰斎の作品は北斎の美人画をつくりといわれる。辰斎名は弟子に譲ったが、北斎は使用しなかったとする説である。不思議なことに



辰斎落款に北斎印を押してあることから北斎画とも考えられる。辰斎は柳花園と号し、この画は吉原に六樹園を迎えに行ったときの席画である。六樹園の狂歌師名は「宿屋飯盛」、北斎と親交があった。

忠考潮来府志

いたこぶし

立川談州楼馬の読本「忠考潮来府志」に、北斎が挿絵を描いた。

左記の絵は佐倉の柳屋勘兵衛宅の呉服兼小間物商の様子で、勘兵衛を巡って話は展開される。

よしはらを／月の出ぬさきと／いそぐのは／きのふむかへに來たし／みいらとり六樹園 (個人蔵)